くまもと文学・歴史館報

くまもと文学・歴史館

第９号
目　次

巻頭言　佐藤　信（くまもと文学・歴史館長）……1頁
企画展・関連シンポジウム報告……2頁～5頁
収蔵品展・館蔵資料ミニ展示・資料紹介・マンガコーナー報告　6頁～7頁
友の会事業・佐藤信館長講演会報告……8頁

「文字が語る古代のくまもと」展の楽しみ

佐藤　信
（くまもと文学・歴史館長）

くまもと文学・歴史館が二〇二四年三月一五日～五月六日に開催する特別展「文字が語る古代のくまもと」への期待と楽しみについて語ってみたい。

古代の日本列島では、中国から漢字文化を導入し、それが次第に広まって、文書主義を採用した律令国家のもとでは各地に広く展開した。日本人が漢字で書いた書物の最初は七一二年成立の『古事記』にくだるが、渡来人や仏教経典を扱う僧侶は、それ以前から漢字に親しんでいた。のち九世紀以降に「かな」が発明されると、文字文化はさらに多くの人びとに広まった。

九州の地は、弥生時代の小国群が中国に使者を派遣して交流し、福岡市から出土した「金印」も出土するなど、漢字文化との接点も多かった。熊本では、五世紀の江田船山古墳（和水町）出土の鉄刀銘文に、熊本の有力地方豪族がヤマト王権の大王との交流を渡来人書記役に漢字で記させている。また共伴の副葬品には朝鮮半島系の優れた遺物が多く、海外とも交流していたことがわかる。最近発見された熊本城跡の横穴（熊本市）から出土した七世紀初めの鉄刀銘文では、ヤマト王権が刀剣銘を使って熊本の小豪族まで掌握していたことがわかる。

文書主義を基調とする律令国家になると、地方の役所である国府・郡家にも漢文に手慣れた下級役人が多数配置されることとなり、地域社会にも漢字文化が浸透した。役所では、文書や荷札の書写材料として紙・木が併用され、役人は公文書や木簡を書くことを業務とした。古代の役人を「刀筆の吏」と呼ぶのは、筆・墨・硯・紙とともに木簡を削る小刀が必需品であったことによる。また役所が正式に発行する紙の公文書には公印を捺印することとなり、諸国には「肥後国印」などの国印が支給された。今回、この肥後国印を推定復元して展示する。肥後国（熊本県）の調・庸の税物は大宰府（福岡県太宰府市）に送られ、その一部の綿・紫草などはさらに都の平城宮（奈良市）にまで貢進された。大宰府木簡には肥後国からの調庸物の荷札木簡がみられる。平城宮からも、肥後関係の荷札木簡や、紙の文書の軸木に文書名を記した平城宮木簡が出土している。この軸木木簡は、今回一三〇〇年ぶりに奈良の都から熊本に里帰りする。熊本でも、木簡や墨書土器・文字瓦などが、古代山城鞠智城跡（山鹿市・菊池市）や役所周辺など各地から出土している。寺院も文字文化の拠点であり、肥後国司が山寺で写経した経巻の実物や、寺の由来などを地域に公示した浄水寺碑（宇城市）の石碑群も今日に残っている。

その他、古代の歴史書の『古事記』『日本書紀』『続日本紀』『日本三代実録』などには、伝承や国司・僧尼のことなど肥後の記事が多く記されている。また、和歌集の『万葉集』や『日本霊異記』『今昔物語集』などの説話、そして『源氏物語』のような物語文学などにも、肥後のことが多々語られている。こうした古代文学からも、文字世界が熊本でも華開いていたことが知られる。

今回の特別展では、銘文刀剣（レプリカ）や国宝平城宮木簡・重文大宰府木簡の実物などをはじめ、熊本県内の出土文字資料である木簡・墨書土器の実物や写経（写真）・石碑（レプリカ）など、古代肥後びとが書いた生の文字資料の展示をめざしている。古代というと遥か彼方の遠い世界のことと思われがちだが、現代人でも読める古代肥後びとが書いた文字を見て、彼らの息吹を身近に感じていただきたい。そして、古代熊本の豊かな歴史・文化の世界の魅力に、思いを馳せていただければ、幸いである。

佐藤　信（さとう・まこと）
一九五二年東京生まれ。東京大学名誉教授、横浜市歴史博物館長。東京大学大学院修了後、奈良文化財研究所、文化庁文化財調査官、聖心女子大学を経て、一九九二年から東京大学で教鞭を執る。二〇一八年定年退職、人間文化研究機構理事を経て二一年度より現職。

企画展――マンガ県くまもと展

期間　令和５年７月21日～９月25日
会場　展示室１・２・３

二〇二一年一〇月「マンガ県くまもと」推進を目指して「くまもとマンガ協議会」が設立された。その協議会の中心五団体の一つとして熊本県も名前を連ねており、これまで、マンガをテーマにした展示会を開催してきた当館が「マンガ県」と呼ばれるにふさわしい、熊本のマンガ文化の豊かさを紹介した展示会。

第一章では「マンガ県くまもと」の概要を紹介した。「温泉県」、「うどん県」と言われて特定の県名が浮かぶように「マンガ県」と言われて「くまもと」と誰もが連想することを目指し、「くまもとマンガ協議会」が設立された。協議会が行っている月一回の勉強会や取り組んできた事業等について写真で紹介した。

第二章「熊本県ゆかりのマンガ家たち」では、熊本県にゆかりのあるマンガ家一三七名のうち、展示に協力してくれたマンガ家六十六名から提供があったサイン色紙や原画等を展示。昭和・平成・令和と続く作家たちをデビュー順に紹介した。昭和から現在まで現役で活動するマンガ家として、川崎のぼる「巨人の星」、萩尾望都「ポーの一族」、松森正「湯けむりスナイパー」、有吉京子「スワン」、ながやす巧「壬生義士伝」らのイラスト入りサイン色紙が並んだ。平成では、麻生みこと「下足痕踏んじゃいました」、鹿子木灯「今日どこさん行くと?」、ねこクラゲ「薬屋のひとりごと」らの色紙の他、井上雄彦のサイン入りジャンパー、ヒロモト森一デザインの「ダースベーダー」フィギュアも展示した。

第三章「マンガを活用する熊本県内の団体紹介」では、マンガを活用した取り組みを行っている県内の二四団体を紹介。行政機関、図書館、博物館、美術館、高校、大学、NPO法人、一般企業などの取り組みについて、各団体から提供された資料とともにパネルで紹介した。熊本県の「クレヨンしんちゃん」、芦北町の「放課後ていぼう日誌」、人吉市の「夏目友人帳」コラボの取り組みなどをグッズなどの資料とともに紹介した。

図書館ギャラリーを利用して、「ワンピース熊本復興プロジェクト」で設立された仲間の像が設置されている自治体の取り組み等を紹介するパネル展示を行った。また、全国の公立高校で初となるマンガを学べる「高森高校マンガ学科」の生徒が制作したマンガ作品を展示した。

熊本ゆかりのマンガ家による作品、二〇〇〇冊が読めるコーナーも設置し、手にとって読まれる姿が見られた。

展示会では、パンフレットを作成し、熊本ゆかりマンガ家一三七名の紹介、協力マンガ家の色紙画像を掲載。マンガを活用する熊本県内の団体紹介も掲載した。

関連イベントとして、記念シンポジウムを開催。合志マンガミュージアム館長の橋本博氏、熊本大学文学部准教授の池川佳宏氏、熊本コアミックス代表取締役社長の持田修一氏、マンガ家の桜田幸子氏が「マンガ県くまもと」の一〇年後について語り合った。内容は当館のＹｏｕＴｕｂｅチャンネルでも配信した（抄録を四～五頁に記載）。「くまもとマンガ協議会」と連携して「推し活@マンガ交流会」を開催。高森高校の生徒ら八組の参加者が自分の好きなマンガについて語った。他に、熊本県ゆかりのマンガを紹介する講座や、ギャラリートークを実施した。

（鶴本市朗）

企画展――ジェーンズと熊本洋学校

期間　令和５年10月13日～12月３日
会場　展示室１

平成二十八年（二〇一六年）の熊本地震で全壊した熊本洋学校教師館（ジェーンズ邸）が、令和五年（二〇二三年）九月一日に一般公開を再開したのにあわせ、ジェーンズと熊本洋学校の功績を紹介した。展示資料は全三十七点であったが、熊本県立図書館所蔵の熊本県公文類纂は十六点と半分近くに及んだ。明治期以降に熊本県庁が作成した公文書・記録類の中に、ジェーンズや熊本洋学校に関する記録が遺されている。また、その他の資料として、くまもと文学・歴史館所蔵の木下順二取材ノート、熊本県立大学図書館蔵の当時の教科書などを展示した。

第一章「教師ジェーンズと洋学校」では、ジェーンズが教鞭をとりながら、熊本の農業近代化に貢献したことを紹介した。ジェーンズを招く際に熊本県とジェーンズの間で交わされた契約書、ジェーンズ一家が熊本の酷暑を避けるため金峰山の西麓に位置する岩戸で過ごしたことを記す帰着届、ジェーンズが日本に見合った農業生産に関する見解を説きまとめた『生産初歩』などを展示した。

第二章「ジェーンズ邸の変遷」では、熊本洋学校閉校後にジェーンズ邸が移築されながらも遺されていたことを紹介した。創建の頃に撮られたジェーンズ邸の写真、ジェーンズ一家が熊本の水を気に入っていたことが分かる洋学校から熊本県に出された伺い書、熊本県に博愛社の活動の協力を求める佐野常民の書状、熊本県庁が古城にあった頃の絵図を展示した。また、壁パネルには、ジェーンズ邸の変遷地図や、洋学校創建の頃の配置図を作成した。

第三章「洋学校の生徒たち」では、熊本洋学校が閉校するまでの五年間に二五〇人を超える士民（武士と平民）の子ども達が勉学に励み、宗教界、教育界、実業界などの多分野で活躍する優秀な人材が世に出たことを紹介した。熊本県が明治五年に生徒の氏名と成績を記録した学業成績報告、徳富猪一郎（蘇峰）の名が記された教科書などを展示した。

第四章「洋学校の時代と文学」では、明治初期の熊本、その時代を題材にしている文学作品を取り上げた。明治九年に熊本洋学校生が署名した奉教趣意書と、同年に起こった廃刀令などに反対する神風連事変の檄文を展示した。徳冨蘆花著『竹崎順子』、石光真清『城下の人』の他に、熊本ゆかりの劇作家・木下順二の戯曲「風浪」に関する取材ノート、熊本特別公演『風浪』の台本・チラシを展示した。

企画展関連行事として、十月二十二日に大島明秀氏による講演会「洋学校の時代―熊本における教育改革の試み―」、十一月五日に松永直輝氏による講演会「熊本洋学校教師ジェーンズ邸の復旧と展示について」が開催された。当館職員によるギャラリートークは二回開催した。

ジェーンズ邸と当館は、歩いて行き来できる距離の近さにある。ジェーンズ邸の公開が再開された直後ということもあり関心が高く、両館を行き来する方が多く見られた。

（大門浩二）

「マンガ県くまもと展」記念シンポジウム抄録

「マンガ県くまもと」の10年後

令和５年(２０２３年)８月20日(日)
熊本県立図書館　３階　大研修室

パネリスト

橋本　博（合志マンガミュージアム館長）
池川佳宏（熊本大学文学部准教授）
持田修一（熊本コアミックス代表取締役社長）
桜田幸子（マンガ家）

池川(司会)　熊本大学文学部の池川です。最初に、これまで熊本で活動してきての気づきなどを含めて、自己紹介をしていただければと思います。

池川佳宏氏

橋本　合志マンガミュージアム館長の橋本です。二〇一二年八月、当時の熊本近代文学館で行われた企画展「漫画王国熊本　マンガミュージアム展」で「漫画王国熊本のこれまでとこれから」というシンポジウムをしました。当時、熊本にはまだマンガ関連施設などはほとんどありませんでした。湯前にあったマンガ美術館が唯一でした。大学でも高校でもマンガを教えるところは一つもありませんでした。そこで、熊本にマンガミュージアムを作りたい。マンガを研究する高校・大学を作りたいと高らかに宣言しました。その妄想が構想となり、実現化していきました。この十一年間に様々なところでまいた種が、まるで運命の糸に操られるように、集約されて、今回の「マンガ県くまもと」のイベントに繋がっていることを認識していただけたらと思います。

桜田　こんにちは、桜田です。「おっぱいの達人」というマンガを熊本日日新聞の「すぱいす」に連載しています。私が夏休みにやっているマンガ教室では、小さい子どもたちが大人には書けないようなものを書いてきます。子どもたちの感性ってすごいなぁと思います。そういう感性を育てる時間は、どこで過ごしたかが大事だと思うので、私は熊本に本当に感謝しています。熊本にマンガ家が多いのは、多分熊本で生まれ育ったからではないかと思います。自然だったりおいしいものだったり、熊本の素材に囲まれて育ったことが大人になって素晴らしい作品を書く礎になっているのではないかなと思っています。こんな環境にいる熊本県民一七〇万人が全てマンガ家になれば、素晴らしい作品が生まれるんじゃないかと思っています。

持田　熊本コアミックス社長の持田修一と申します。『週刊少年ジャンプ』五代目編集長であった熊本出身の堀江信彦が「シティハンター」の北条司、「北斗の拳」の原哲夫らと一緒に、マンガの収益をそのまま若い人材の育成に還元できるマンガ出版社コアミックスを二〇〇〇年に東京吉祥寺に作りました。二〇一六年に熊本地震があり、堀江から「マンガで熊本を元気づけたい」と言われ、二〇一七年に第一回「熊本国際漫画祭」をやり、これが熊本に来たきっかけになります。二〇一八年に当社主催の世界最大規模のセリフのないマンガ賞「サイレントマンガオーディション」の受賞者二〇カ国、五〇名を高森町に呼びサマーキャンプをしました。これをきっかけに高森町とコアミックスがまちづくり事業の連携協定を結びました。同年、熊本コアミックスを熊本に創立し、九州のマンガ家志望者が東京の編集部と直接つながるマンガラボを設置、高森温泉館跡にアーティストヴィレッジという共同生活ができる育成施設を作りました。二〇二〇年にマンガをリアルにライブで体感できる劇団「０９６ｋ熊本歌劇団」を結成しました。高森高校マンガ学科も二〇二一年九月に高森高校と高森町と熊本県教育委員会とコアミックスが四者協定を結び、開校しました。マンガから端を発するエンターテインメントのクリエイター育成やパフォーマンスを、熊本を拠点に育てていきたいというのがうちの会社の事業の考え方です。

持田修一氏

池川　私は静岡県出身で編集者や博物館学芸員等のほか、文化庁事業のコーディネーターを十年ほどしました。全国にあるマンガの数を調べる事業で熊本を訪れたのが最初になります。その時に、橋本さんと初めてお会いし、まだ構想の段階だった合志マンガミュージアム設立のお手伝いや震災後のボランティアで交流をさせていただきました。二〇二二年、熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センターの設立に呼ばれ、移住することになりました。同年一二月に大学主催でシンポジウムを行い、「マンガ刊本のアーカイブ」設立を打ち上げました。「マンガ学」を研究するためには、資料としてマンガの単行本、特に雑誌が必要になります。ところが残念ながら、それらを閲覧できる施設が九州にはありません。そこで、橋本さんが代表を務めるＮＰＯの熊本マンガミュージアムプロジェクトが本を収集していることから、保存や閲覧施設を大学と共同運営することを提案しています。それが五〇万冊のアーカイブをめざすということです。

橋本　持田さんにお聞きします。高森高校

マンガ学科が目指すものを教えてください。

持田　小中学生がなりたい職業の上位にクリエイティブ系、特にマンガ家、アニメーターなどが挙げられます。それらは正解がない職業です。正解がないけれどもチャレンジしていく若い人たちを育てる一つのモデルケースみたいになってほしいなと思っています。また、マンガ学科の生徒は全員がマンガ・アニメに興味があって、同じ夢とか目標に向かって切磋琢磨していくという環境の中で、内面的に明るくなっている子たちがたくさんいます。エンターテインメントの世界に必要な人材、ＡＩに取って代われないような人材を育成していく基になるような、そういう学校になっていくイメージはすごくありますね。

池川　それは高森という土地にも大きく関係していますか。

持田　高森町は神話の町で、阿蘇五岳、根子岳、まるでジブリのトトロがいそうな風景で、水がおいしく、人が少なく、通信環境は10ギガの回線で、編集者がいて、出版社がある、こんな素晴らしい環境はないと海外のクリエイターは言っています。熊本の人たちは気づかないのですが、世界中から見たら魅力的な環境にあると思います。

橋本　モデルケースの高森で、ある程度の成功事例ができたら、この影響を熊本県全体に広めていくことも考えておられますか。

持田　マンガ家って、ヒットすれば億万長者になるので、納税額も高いんですね。くまモンをはじめ、マンガとかアニメとかキャラクターの力をすごく理解している県民だと思うので、高森高校が成功して熊本県全体を全員マンガ家にすれば、すごい経済効果をもたらすのではないかと思います。

池川　一昔前だとマンガ系クリエイティブの発信地は東京の吉祥寺、みたいなイメージでしたが、そこにある会社が熊本に支社をというところが面白いですね。

持田　デビューしたら憧れの吉祥寺に仕事場を構えようという若い人がたくさんいました。同じ夢や目標を持った人たちがいる環境がすごく良くて、熊本にもそういう環境を作りたいと、今やっているところです。

桜田　クリエイターを育てていくには小さいころからそういう環境に身を置くというか、自分が書いたものを、周りに見られることに慣れることから始まると思います。

桜田幸子氏

池川　周りとの心理的な壁が溶けるような土壌があればということですね。

桜田　もっと書ける子が水面下にはたくさんいると思うんです。今はＳＮＳでどんどん発信していける時代になりました。年配の方にも上手な方はたくさんいます。この人材を活用して、保育園と併設したマンガに特化したホームで、おばあさんと子どもたちが一緒にマンガを書いていけるようなところが、全国に先駆けて熊本にできたらと思います。

橋本　高齢者の人たちにも、作品の発表のチャンスを与えていくと、熊本県民全員マンガ家という妄想が現実化するかもしれませんね。

池川　世界に簡単に発信できる時代だからこそ、ファーストステップをいかにクリアできるかが重要だったりしますね。

持田　高森高校のマンガ学科では、課題作品は、必ずみんなの前で発表させています。人の目に触れて、その反応を受けてどんどん作品のクオリティが上がっていくので、そのきっかけを作っていくといいなと思います。

橋本　そこで一言、アーカイブは昔を懐かしむノスタルジーではなく、これからのクリエイターのために昔の作品を集めています。将来のためのアーカイブということを、ぜひ理解していただきたいと思います。

持田　マンガを直接ライブで体感できるメディアとして劇団を作ったのですが、実は根底は舞台もマンガと一緒です。コンテンツを作りキャラクターを作る最初の発想は一本の鉛筆と一枚の紙です。何もない状況で、ゼロから1を作るクリエイターを育てる土壌というのは、日本が世界に誇れるところです。伝統というか、厚みのある文化的な土壌が日本にはあるんだと思っています。

池川　それは熊本に独特な「わさもん」につながりますか。

持田　「わさもん」はクリエイター気質です。しかも狭い世界からでっかい世界に行きたいと思わせるような発想の原動力になっています。スケールの大きい考え方をする人が僕は「わさもん」だと思います。

橋本　熊本になぜマンガ家が多いのか。アニメーターも特撮関係も多い、やたらとサブカルに強いんです。やっぱり「わさもん」的な性質が原因なんですね。

持田　熊本の人たちには当たり前のことが都会ではすごいワイルドに聞こえる。海外の人たちが高森に来て感心したのは、熊本の人たちの器の大きさ、スケール感ですね。熊本の魅力ってたくさんあって、でも、それを上手に発信できていないのかなと思います。

橋本　発信力についてはすごくわかります。

橋本　博氏

池川　これからは発信力ですね。土壌はもうあるわけですから、発進力をつけていくということは、ひとつ課題として見えてきますね。

予定の時間になりました。皆様どうもありがとうございました。

収蔵品展 アーカイブズシリーズ

アーカイブズに見るくまもと21

◆日本談義／どうする人吉藩～米良山毒薬事件!?～

期間　令和５年３月15日～５月８日

●日本談義

荒木精之が〈地方〉と〈中央〉との直結を目指し、昭和十三年に創刊した総合文化雑誌『日本談義』。熊本の文化を牽引してきたその道のりを概観する展示を開催した。熊本の文化的支柱として、また、九州を代表する雑誌としての地位を築いた『日本談義』を、その節目となる号や、掲載原稿をもとに紹介。創刊号のほか、わずかなページ数で刊行された戦時下の号、昭和二十八年の「六・二六水害」特集など、そのあゆみは熊本の歴史とともにあった。泥水が社屋の軒下まで押し寄せた水害特集号については、俳人有働木母寺や郷土史家上妻博之の自筆原稿を紹介した。『日本談義』は昭和五十七年、荒木の逝去により終刊するまでに、全四六四冊が刊行されている。

●どうする人吉藩

～米良山毒薬事件!?～

肥後と日向の国境に位置する米良山で起こった毒殺事件について紹介した。事件は幕府にも知られることになり、幕府から米良山の支配を預かっていた人吉藩は厳しい対応を迫られた。その一連の経過は、相良文書（人吉藩文書）の中にも記されており、人吉藩と米良山の間で交わされた書状を読むと、当時の緊迫感が伝わってくる。

アーカイブズに見るくまもと22

◆新収蔵資料展／検地帳から地券へ

期間　令和５年５月19日～７月３日

●検地帳から地券へ

明治政府が行った地租改正から、令和四年（二〇二三年）は一五〇年にあたったことから、近世から近代にかけて行われた税制改革を紹介した。細川氏が肥後入国後に行った検地の成果である「地撫帳」、相良藩が相良清兵衛事件後に行った検地帳や、明治初年の地租改正事業に対し増税を懸念する民衆の姿を記した県政資料、実際に発行された改正地券などを展示した。

●新収蔵資料展

くまもと文学・歴史館が近年新たに収蔵した文学資料を紹介した。おもな展示資料は次の通り。

徳冨蘆花の短冊は、大正十年に刊行された世界一周の紀行文『日本から日本へ』に掲載のもの。今回、愛子夫人の短冊とともに展示した。歌人与謝野寛が渋川玄耳に送った書簡は、当時青島に住んでいた病身の玄耳を気遣う内容。歌人として、編集者としての二人の交流がうかがえる。また、球磨の俳人井上微笑の雑誌『白扇会報』関係資料として、俳句の選を行っていた渋川玄耳の書簡・句稿のほか、高浜虚子の書簡も展示した。ときに中央で活躍する俳人らにも俳句を依頼していた井上微笑の俳句熱が伝わる資料と言える。また、漱石自筆の句幅をはじめて展示した（次頁に詳述）。

館蔵資料トピック展示

ＮＨＫ連続テレビ小説「らんまん」の放映に合わせ、牧野富太郎が上妻博之(まさゆき)に宛てた葉書・書簡・雑誌三点を初公開した。牧野は文久二年(一八六二年)、高知県生まれ。「日本の植物学の父」といわれ、約一五〇〇種類以上の新種を命名し、地方の植物研究者とも広く交流した。上妻は明治一二年(一八七九年)、熊本市生まれ。九州学院の博物学教師として務める傍ら、天然記念物の調査や、郷土の歴史研究を行った。二人は植物の種子や標本などを送りあい、濃密な交流をしていた。今回の展示では、牧野の葉書・書簡、上妻文庫といった文字資料から二人の功績を紹介した。展示資料総数五点。

収蔵資料紹介　～今年度の展示から～

◆夏目漱石句幅「長けれど」

夏目漱石による俳句「長けれど何の糸瓜とさがりけり」の短冊を軸装したもの。俳句は明治二十九年、熊本時代の作。第五高等学校の教師として熊本に赴任した漱石にとって、句作は唯一の文学活動であり、熱心に俳句を正岡子規に送っては添削を請うた。句の内容は、長い糸瓜がぶら下がっている情景と「何の糸瓜の皮、糸瓜の皮とも思わず」(＝少しも意に介しない、問題にしない)という慣用表現を踏まえたもの。実景と漱石らしいユーモアを含み、子規の評点も高かった。後年、子規の忌日がその辞世にちなみ「糸瓜忌」と呼ばれると、漱石は糸瓜からの連想でこの句を思い出し、『吾輩は猫である 中』の序文で言及している。

◆米良家老申告状案

「米良家老申告状案」は、米良山毒薬事件の詳細を米良家家老衆から人吉藩家老衆に伝えた書状である。貞享元年(一六八四年)、米良主膳の江戸参府の途中に、銀鏡(しろみ)の米良源太夫宅で饗応を受けた後、家老・米良四郎右衛門の容体が悪化し急死した。以前から源太夫宅で饗応を受けた者が体調を悪化させたなどの噂もあり、源太夫父子は切腹させられた。源太夫父子には書状には、「切腹」「歯黒ミ息臭」「吐瀉」「毒ニあたり申候哉」と生々しく事件の状況を伝えている。

米良山領内には、地頭と呼ばれる一族・家臣が複数おり、それぞれ独立志向が強く争い事が絶えなかった。謎の多いこの毒薬事件もその一つとされ、人吉藩も米良山統治には、かなり神経を使っていた。

展示室３　マンガコーナー

「マンガ県くまもと展」に向けて、五月から七月まで熊本ゆかりのマンガ約三〇〇冊を設置。七月からの展示会開催中は規模を拡大し、『あさりちゃん』『ワンピース』『ニュクスの角灯』など約二〇〇〇冊を設置。夏休み期間中でもあり、毎日、多くの来館者がマンガを読む姿が見られた。一〇月から一二月までは企画展「ジェーンズと熊本洋学校」に合わせ「異国人とニッポン・学校」をテーマに『ふしぎの国のバード』、『ダーリンは外国人』、『暗殺教室』などを設置。一月からは、「熊本ゆかりマンガ家の映像化作品」をテーマに『ウロボロス』、『おーい！とんぼ』などを設置。資料はＮＰＯ法人熊本マンガミュージアムプロジェクトより提供。

友の会事業

◆定例事業

○**月案内発行**　くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。

○**文章勉強会**　毎月一回開催。有志による文章講座。

○**歴史勉強会**　毎月一回開催。有志による古文書講座。

◆湧水発行

会員の作品を集めた文芸誌「湧水」の三十一号発行。

◆今年度の主な事業

5月6日　友の会総会（半藤英明氏による記念講演会　演題：「心に響く文学の言葉」）

奇数月（7、9、11、1、3月）短歌講座
講師：阿木津　英氏

10月14日　湧水講演会
第1部　演題：「俳句のレトリックとは何か～漱石俳句と『肥後の城』のレトリック～」
講師：永田満徳氏
第2部　パネルディスカッション：テーマ「韻文におけるレトリックの可能性」
パネリスト：永田満徳氏、向井ゆき子氏、津留清美氏

11月1日　秋の文学・歴史散歩（芦北町、水俣市散策）

12月9日　湧水講演会
演題：「『福田四兄弟』を顕彰しよう」
講師：相藤克秀氏

佐藤 信館長 連続講演会

佐藤 信館長

特別展「文字が語る古代のくまもと」に向けて、昨年度に引き続き、佐藤信館長による連続講演会を開催。今年度は「古代文学とくまもと」をテーマに四回開催した。古代肥後における漢字文化と文学の展開の実像について具体的な解説があった。また、くまもと文学・歴史館ＹｏｕＴｕｂｅチャンネルにおいて、各回の講演会動画の配信を行い、五千回を超える視聴があった。

第1回　4月22日(土)
演題：「古代文学とくまもと①　古事記・日本書紀」

第2回　9月9日(土)
演題：「古代文学とくまもと②　万葉集」

第3回　11月25日(土)
演題：「古代文学とくまもと③　古代説話」

第4回　12月23日(土)
演題：「古代文学とくまもと④　肥後国司の文学」

くまもと文学・歴史館のご案内

所在地
熊本市中央区出水2丁目5番1号
（熊本県立図書館併設）
電話（096）384－5000㈹

開館時間
午前9時30分～午後5時15分

休館日
火曜日・毎月最終金曜日
年末年始・特別整理期間

入場料
無料

最寄りの交通機関
(1)市電＝「市立体育館前」下車・徒歩5分
(2)バス＝「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩5分

文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。

くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。

詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合せ下さい。

くまもと文学・歴史館報
第９号
令和６年(2024年)
３月31日発行
編集
発行　くまもと文学・歴史館
〒862-8612
熊本市中央区
出水2丁目5番1号
電話096-384-5000㈹
FAX096-385-4214